いのちと地域を守る

震災5年 教訓の共有に意義

「いのぐ（生き延びる）」力育てる

防災学習発表会・防災講演会

高知市での巡回ワークショップ「むすび塾」の一環で、同市潮江南小主催の防災学習発表会が2月19日、高知新聞社主催の防災講演会が20日に市内であった。東日本大震災の教訓を伝えたほか、地震・津波の犠牲者を最小限に抑えるため、東北の被災地と南海トラフ地域の連携強化を訴えた。

学習発表会では、震災発生時、石巻市大川地区の自宅で津波に襲われた慶大1年菅原彩加さん（20）が登壇。母、祖母、曽祖母を失い、自らも波にのまれながら九死に一生を得た体験を、4～6年の児童計約180人に語った。

家庭での当時の防災対応を尋ねられると、菅原さんは「水や食料は準備していたが、家具の固定などは不十分だった。しっかり備えることが必要」と答えた。

防災講演会は「南海トラフ地震から『いのぐ』力の育て方」と題し、市民ら約380人が参加した。いのぐは、高知の方言で生き延びることを意味する。

東北大災害科学国際研究所の今村文彦所長は基調講演し、集まった市民に「東日本大震災の被災地と南海トラフ巨大地震が心配されている高知が、対話を通して未来をつくることが必要だ」と説いた。

学生団体「高知大防災すけっと隊」代表の折中新さん（22）と菅原さんの対談もあり、2人は「コミュニティーづくりは地域の防災力強化につながる」「学校を中心に地域全体で防災教育を進めるべきだ」と強調した。

菅原さんは「地域防災に私たち若い世代が関われることは多い。今回の交流を機に防災への関心を高めてほしい」と呼び掛けた。

防災学習発表会で児童の質問に答える菅原さん＝２月19日、高知市潮江南小

高知・潮江南小 参加児童の誓い

防災学習発表会に参加した児童たちは、慶大１年の菅原彩加さん（20）の被災体験を聞き、素早い避難行動や日頃の備えを誓った。児童代表の声を紹介する。

集合場所決める

4年・岡西　是知（よしとも）君（10）

菅原さんの講演を聴き、津波に建物や車、人が流されるところを動画で見て怖さが分かった。自分の家でも避難について話し合い、集合場所を決めておくことが大切だと思った。大人になったら、災害があった時に手助けできるような人になりたい。

先頭切って避難

5年・田村美咲希さん（11）

今回の話を聞くまで、人が死ぬことのつらさを知ろうとしていなかった。南海トラフ巨大地震が起きたらまず、パニックにならないよう頭と体を守り、高い所に向かって自分が先頭を切って避難したい。私の大切な地域の人たちや家族、友達を絶対に守りたい。

津波念頭に行動

6年・橋村ありささん（12）

講演では、地震がきても安心していると命取りになることや、備えをしないと大事な人をなくすかもしれないことが分かった。もう一度家族で地震について話し、瞬時に的確な判断ができるように日頃から地震、津波のことを頭に入れて行動するようにしたい。

インタビュー

日本災害復興学会会長 中林 一樹氏

真実の「伝え部」必要

東日本大震災の発生から5年を迎えた。震災の教訓を伝承する意義を、日本災害復興学会会長の中林一樹明治大大学院特任教授に聞いた。

―東日本大震災の被災者が各地で、震災の教訓を語り継いでいる

「語り部が単に体験談を話すだけでは、教訓が生かせない場合がある。震災前に何をしておけば、家族を守れたのか、被害を軽減できたのか、そういう備えのポイントを意識して、次の世代、次の被災地に伝えることが大事になる」

「聞き手にとっても、被災者の体験談を自分や家族に役立てるためには、少し工夫が必要だ。巡回ワークショップ『むすび塾』は、被災者と意見を交わし、現地や家庭の対策を探っている。聞き手が被災体験を自らの身に置き換えて考えることができる仕掛けになっている」

―南海トラフ巨大地震をはじめ、全国各地で自然災害が心配される。震災の被災者、被災地に期待する役割は。

「被災者の実体験は、何よりも強いメッセージ力を持っている。出張して語り部をすることも含めて、多くの地域や人と連携し、教訓を共有してほしい。震災の記憶はどうしても、年月とともに薄れていく。語り部は、それを踏みとどめる活動にもなる」

「被災地にある津波の痕跡も、教訓を伝える大きな力を持つ。木造建築しかなかった昔は、津波で全て流されたが、今回は鉄骨の建物などが残っている。痕跡がなくなれば、被災地内外で風化が加速しかねない。次世代に同じ悲しみが繰り返される懸念もある」

―震災の教訓を伝え続けるために必要なことは。

「人間には寿命があるから、被災者が未来永劫（えいごう）、教訓を語り続けることはできない。1995年の阪神大震災も、発生から20年たって被災体験者は減っている。だから教訓を生かすには、震災を直接体験していない第三者が、震災の真実を伝えることが必要だ。その役割を果たす人は、私は『伝え部』だと思う。報道機関はその一翼を担う。遠い将来まで、月命日に震災を振り返り、教訓を伝え続ける伝え部としての取り組みが求められる」

なかばやし・いつき　福井大卒。東京都立大（現首都大学東京）大学院修了（工学博士）。都立大助手、助教授、教授を経て、11年４月から明治大大学院特任教授。13年１月に日本災害復興学会会長就任。専門は都市防災学、災害復興学。福井県出身。68歳。

連携に期待

真剣に話聞く市民が印象的

高知市・山中晶一主査

高知市は、東日本大震災の教訓を基に災害時の避難マップを市内全戸に配布した。避難対策の啓発に努めているが、市民に実感を持って受け止めてもらうことはなかなか容易ではないと感じている。

震災を経験した人たちには、語り部をはじめ当時の経験を生の言葉で伝え続けてほしい。今回のむすび塾や講演では、高知市民が今までにないほど真剣な表情で聞いていた姿が印象的だった。

東日本大震災の経験者の役割は大きい。市民レベルで交流を続け、防災意識を高めたい。

沿岸も安心に暮らせる街を

高知新聞報道部 山岡正史部長

高知県は沿岸部に住宅が集中する地域が多い。東日本大震災後、巨大地震と津波が心配される南海トラフ地域に残ることを不安に思う人が増えているようだ。一方で震災の被災地ではつらい経験をしたにもかかわらず、古里で生きていこうと復興に力を注ぐ人たちがいる。

防災を進めるには人間同士が深く関わり合うことが重要だ。東北の人たちが震災から学ぶ姿に触れ、われわれもその姿勢を学び取っていく必要がある。若い世代を中心に沿岸部にも安心して居住できる街をつくり、地域を守っていきたい。

高知新聞 こう伝えた

高知市潮江南地区で開催した巡回ワークショップ「むすび塾」と避難訓練は、高知新聞社と共催した。ことしは高知県で670人が犠牲になった1946年の昭和南海地震から70年の節目に当たり、同社は方言で「生き延びる」を意味する「いのぐ」と名付けた防災啓発プロジェクトを進めている。

備えの浸透を図るため、11日にむすび塾などの特集記事を掲載し、南海トラフ巨大地震を想定した訓練と話し合いを詳しく報じた。住民、学校とともに地域の課題を探った紙面の一部を紹介する。

東日本大震災5年

■むすび塾に参加して

教訓胸に実効ある防災を

いのぐ

要支援者と親子が避難

潮江南小校区舞台に訓練

「てんでんこ」どう徹底

顔見知りつくる努力を

訓練でも避難袋を

ブロック塀に懸念相次ぐ

高いブロック塀心配

車使い物にならず

非常時用にあめ玉を

学校への避難で不安

屋外では状況確認を

避難しのげる場所を

日頃からイメージを

高知新聞11日朝刊特集面

被災3県の語り部

全国で情報発信 来訪者増目指す

東日本大震災の風化を防ごうと、被災地の住民が語り部として伝承活動に取り組んでいる。復興工事の進展などで震災当時の状況が見えにくくなる中、津波の恐ろしさと教訓を生の言葉で伝える貴重な存在だ。

陸前高田市の釘子明さん（57）は語り部活動を事業化し、2013年4月に「陸前高田被災地語り部 くぎこ屋」を開業した。多い時で1日3団体を案内し、被災時の様子を証言する。

全国での講演にも出向く。「被災地の出来事は全国どこでも起こり得る。外に出て発信し市内への来訪者を増やしたい」と言う。

石巻市の公益社団法人みらいサポート石巻には元教師や経営者ら語り部10人が籍を置き、各地から訪れる人に体験談を語る。15年の聴講者は約9100人に上り、前年の倍近くに増えた。担当者は「語り部と街歩きをするなど、参加者の要望に沿ったプログラムを用意している」と話す。

東京電力福島第1原発事故による全町避難が続く福島県富岡町では「富岡町3・11を語る会」（郡山市）が活動する。語り部は10～80代の27人。町内を案内するなどして事故現場のいまを伝える。担当者は「語り部を通して震災から5年の現状を知ってほしい」と訴える。

このほか遺族、ホテル従業員、タクシー運転手、中高生、大学生ら、さまざまな立場の被災者が各地で語り部を務めている。岩手、宮城、福島の各県によると、活動している団体数や人数の詳細は把握できていない。

東北大災害科学国際研究所の佐藤翔輔助教（災害社会情報学）は「被災地を訪れる人は減少傾向にある。語り部活動で、被災地を繰り返し訪れ魅力を広めてくれるファンを確保することが重要になる」と指摘した。

学生ボランティアに被災地を案内し被災時の様子などを伝える釘子さん（左端）＝2013年6月、陸前高田市